■大町桂月の常呂村滞在に関する時系列資料：「桂月全集」別巻記述の日記要約

※大正１０年９月、時の文豪／大町桂月が常呂村を訪れ、サロマ湖とオホーツク海を隔てる砂州の景色を見て「龍宮街道」と名づけました。
今回、大町桂月の来村に関する資料と当時の写真などを使い、大正時代の常呂村がどのようなものだったのかイメージをふくらませるためにまとめました。
大正１０年をピンポイントで表すには正確性に欠けますが、大まかなイメージを感じてもらえればと思います。

日記の要約（月日・時間・内容）	日記を補完する資料と内容
〈大正１０年８月〉 ●２０日 はじめて大雪山を見る。上川泊。 ●２１日 霊山碧水（層雲峡）探勝。層雲峡の命名。 ●２２日 大雪山へ入山。大雪山縦走。 ●２６日 下山。列車で美瑛から旭川へ。旭川滞在。 ●２９日 列車で網走へ。網走滞在。	※「層雲峡」の誕生
〈大正１０年９月〉 ●9月2日　晴れ ９時半に網走発。田所碧洋と小さな馬に乗る。馬夫はつかない。町外れで馬は人をバカにして動かないので、しかたなく２人で馬から降りて引っ張る。 ５～６町過ぎてから乗る。馬はのこのこ動く。 卯原内の郵便局へ行く白馬に乗った運搬人が先に立ち、木の枝でムチを作ってくれ、はじめて馬が小走りする。 萩が馬に乗っている人よりも高く、蟲の声が聞こえる。	※注：「常呂村当直日誌」では「９月２日（金）２０．５度　晴れ」の記載 大正１０年の常呂村 人口　本籍人　男１，５８０　女１，５３６ 計３，１１６人 現住人　男１，８６８　女１，８３２

卯原内までの３里２８丁には１軒の家もない。左に網走湖がちょっと見え、右に能取湖が段々近づいてくる。ぐるりと低い山があり、左側が開けている。
一本道なので馬車の馬夫は眠り、馬がひとりでに歩いて行く。のんきだ。
１１時半に卯原内の駅逓でご飯を炊いてもらう。
馬を乗り換え、馬追が馬に乗って先導する。
湖畔にサンゴのような草が生えている。
晩方、常呂に着く。
イワケシュ山は最高で眺望が良い。三湖一海里三里四方の平野。

「桂月全集別巻・下」の「三たび北海道」１３１６－１３１８ｐより

本当の北海道気分を味わうには、駅逓の馬に乗ることにある。
汽車の旅だけでは、本当の北海道を見たとは言えない。
駅逓とは馬を乗り継いでいくところで、本州にはない。北海道でも既に開けた西武には希にしかなく、東部に多い。
想像して欲しい。４～５里の間、ただ道路だけで家は１軒もないところに１軒だけ駅逓があって、載ってきた馬とそこの馬を乗り換える仕組みになっている。
駅逓で昼食を食べたり、宿泊することもできる。
２０世紀の世界を離れて昔の世界を旅行している心地がする。
この駅逓の馬について、いろいろ滑稽な話がある。
網走から駅逓の馬に乗ってサロマ湖方面に向かったが、同行の田所碧洋という青年は馬に初めて乗った。私は初めてではないが素人同然。

＊ここからは日記の内容と同じなので省略。

卯原内からは駅逓の男が馬で先導してくれた。その日は、常呂という村に着き、駅逓と宿を兼ねる家に泊まった。
駅逓の由来を尋ねると、北海道開拓では最初に大きな道路の４～５

計３，７００人
戸数　７５６（１世帯　平均４．９人）
（大正１０年末現在　戸口調査）

※注：「大正１３年測図　五万分一地形図網走十六号（常呂）」（大正１４年８月印刷）では、「卯原内－常呂間は約１９－２０ｋｍ」
※注：「常呂村当直日誌」に「本日午後４時、文学士／大町桂月氏来村」の記載あり

※注：イワケシュ山の眺望に関して
『イワケシュ郷土史』には、「文豪、大町桂月が本村に立ち寄り、イワケシュ山頂から遠くオホーツク海を見て、知床連峰・斜里岳等、雄大な大自然に感嘆したという。その時の道案内は、常呂村２代目村長／大柿千代太郎他有志一同であった」と記載
※注：常呂－イワケシュ山ふもとまでは約１２ｋｍ
※別添１：イワケシュ山周辺地形図「常呂全図」は、大町桂月補強資料参照
※別添２：大町桂月の登山に関する基本は、大町桂月補強資料参照
※注：『桂月全集』には、常呂村での講演に関する記述はないが、「常呂村当直日誌」『イワケシュ郷土史』に次の記載あり
＊「常呂村当直日誌」には、「午後８時から市街公会堂で講演。聴衆は２００人あまりで盛会だった」の記載あり
※別添３：公会堂及び当時の常呂村のようすに関しては、大町桂月補強資料参照
＊『イワケシュ郷土史』には、「青年団一同は、次の演題の講演を聴いたという。〈皇室中心主義と思想

里ごとに小屋を建て米とみそを備えていたが、旅人の中には盗んでいく者もいたので番人を置くようになったという。
　その番人が馬を飼い、宿屋を営むようになったとのこと。卯原内がそれに当てはまる。それが進み、部落をなす土地の場合は、半駅逓、半宿屋となり、常呂の宿がそれになる。それがいっそう進むと宿屋専門になり、駅逓の制度が廃れていく。北海道の西部はほとんどそうなっている。

　笑い話がある。同行した碧洋が馬の鞍で尻の皮をすりむき、痛がっていた。白粉を塗れば治ると教えられたのでその通りにしたら、翌朝にはけろりと治った。
　白粉は顔に塗るものとばかり思っていた私には奇異に感じた。しかし、美人の顔に塗られるべきものを男子の尻に塗られたことを、白粉が知ったならばさぞかし歯ぎしりしたことと笑ってしまう。

●９月３日　くもり
　馬で行く。昨日は幼稚園、今日は小学校。
　福嶋の若人、柴田、細川（村役人）、碧洋と桂月。
　丘陵の上にはハギが咲き、竪穴がある。鐺沸で休む。
　加藤留五郎が発動船を仕立ててくれ、松田翁がとうもろこし、中野氏がウィスキー２本を差し入れ、船の上、みんなで飲み食いする。
　かき島の湖口を遡り（冬は砂でふさがる）、ガスがかかって幌岩山がかすかに見えるが最高だ。
　ワッカの元駅逓に上陸。（略）
　左に湖、右は海、ハマナスが多い。
　土佐人　中野宏平　加藤留五郎
　鹿児島人６８歳　松田三次郎
　河村重蔵　細川元一　柴田喜久哉
　加藤氏は船主　鐺沸では部長の河村重蔵宅で休む。

　問題〉の記載
※別添４：講演のテーマについては、『大町桂月の大雪山』　大町桂月補強資料参照
※別添５：常呂の駅逓に関しては、大町桂月補強資料参照

※注：『桂月全集　上』に、「９月４日、碧洋馬にて尻の皮をむき白粉をぬる（柴田氏注意）」の同じ場面の記述あり。
　＊「柴田氏」は、常呂村の柴田喜久哉（明治１０年、岐阜県生まれ。３５年、常呂村に移住、常呂村郵便局長拝命、大正７年辞職。１０年８月、常呂川治水工事起工と同時に治水事務職員に。昭和２年、治水工事竣工で釧路川治水事務所に転勤）『常呂村史』

※注：「常呂村当直日誌」には、「９月３日（土）２０．５度　濃霧　外遊中の東宮殿下（注：昭和天皇）の無事帰朝お祝いのため、小学校児童、在郷軍人団、青年団の主催によるお祝いの式典と旗行列を行った。　昨日来村の大町桂月氏、本朝佐呂間村に向け出発。細川書記、漁場実査を兼ね、ワッカまで同行」の記載あり。

※別添６：大正１０年頃の鐺沸（トーフツ）の状況については大町桂月補強資料参照
※別添７：「ワッカ駅逓」については、大町桂月補強資料参照
※別添８：細川（村役人）、中野宏平、加藤留五郎、松田三次郎、河村重蔵、細川元一に関する人物データは、大町桂月補強資料参照

奇花異草
草原一望接天空　馬跡輪痕川字通
百里狭州波浪裡　恍然疑是至龍宮

木はかしわならだ。ほんの少し雨模様になった。
日が暮れ、水が赤いので赤沼というフレワッカの側を通って午後７時半に下湧別に着いた。
ススキや砂地なので進みにくい。ハマナスの実が赤い。花は紅に紫がかってバラと似ている。実に美しい。

ライトコロ川はサロマ湖に注ぐ死人の意味がある。アイヌの古戦場だったとのこと。
鐺沸は元々アイヌ人だけのところだった。
木を切り出す発動船が２隻もある。

「桂月全集別巻・上」の「北海道山水の大観…８猿澗湖」１７－１８ｐ
日本三景の一つ、天橋立（京都府宮津市）はその長さが４２町ある。これに類するものを求めるならば、弓ヶ浜（鳥取県西武）で長さ３里、大天橋と呼ばれる。
これより大きなものを求めるならば北見の猿澗湖（サロマ湖）とオホーツク海との間に長州が突き出ている。長さは１０里で、天橋立の９倍、大天橋の３倍である。
幅は、天橋立は数十軒、大天橋は１５～６町、この長洲は２～３町。

大天橋は幅が広すぎ、むしろ半島と言うべき。長洲の長さと幅は天橋立と型が同じだ。９倍の天橋立と言っても相通じる。
ことに大天橋は幅が広すぎるので、歩いても左右に水面をみることができないが、天橋立も９倍の天橋立も左右に水面が見える。

この９倍の天橋立にはまだ名前がない。９倍の天橋立では地名としては妥当ではない。猿澗湖から取って猿澗崎としても良い。猿澗湖とオホ

※注：『常呂町百年史』の「常呂町アイヌ語地名の記録」に「フレワッカ：赤い・水の意」説明
＊別添７：フレワッカ及びワッカ駅逓の場所に関しては、大町桂月補強資料参照

※注：『常呂町百年史』の「常呂町のアイヌ語地名の記録」にライトコロの説明として次の記述があります。「鐺沸市街と栄浦市街の間のところにライトコロ川が湖にそそぐ大きな川口がある。ライ・トコロ（死んだ・常呂川）、つまり常呂川の古川の意。常呂平野の奥、イワケシ山の裾にもライトコロの名が残っている。常呂川がそのあたりから平野の西寄りを流れ、上記のライトコロとつづいて、サロマ湖にそそいていた名残である」

ーツク海の間にあるので、「猿」と「オ」を合わせて猿尾崎も良いが、私はここに**龍宮街道と命名する**。あまりに奇抜なので世の中に通用するかどうかは分からない。

猿澗湖は海岸湖の一種で、周囲は２３里。長方形で沿岸の出入りはほとんどなく、盗難の隅で海に通じている。
下湧別で下車するとすぐ龍宮街道の入口に達する。最初は幅が広いが次第に狭くなる。中頃は道路を歩くだけでは片方の水面しか見えないが、風景を愛する者は足の労をいとわずとんがっている丘陵の上を歩くべきだ。そうすれば左右に水面を見ることができる。後半は水面が左右に見えるようになっている。

「桂月全集別巻・下」の「四たび北海道より」１３１８ｐ
北海道には内地では見られない景色が少なくない。まず第一は大雪山で偉大で変化に富んでいる。第二は北見の猿澗湖である。周囲が２０里あまりで長さが１０里もある狭い州が海に接している。一方は湖水の静かな波で、もう一方はオホーツク海の荒波を左右に見比べながら果てもわからない狭い州を行くと人間世界を離れて龍宮に旅するかと思うくらいだ。天橋立などはとても比較にならない。
しかし、この天下無類の州に名前が付いてないので遺憾に感じ、「龍宮の通路」と命名した。その中央あたりに清水がわき出るところがあり、その場所をアイヌはワッカと言っていた。ワッカとは水のことをいうが、その発音を借りて一つは「和歌半島」とも命名した。また「歌の長洲」とも命名した。

※別添７「ワッカ」についは、大町桂月補強資料参照

●９月４日　くもり
午前１０時２５分に下湧別を出発。
１１時半に湧別着。松田三次郎を見送る。
午後３時に上相内に着く。常呂の有志、上杉眞治、青年団長の小林千代

※常呂から上相内までの移動手段について
明治４１年に野付牛ー常呂間の道路が開通したが、乗合自動車の運行開始は昭和４年（「岐阜百年史」）。
「当直日誌」（９月４日）に「大柿村長網走へ出張」

松、村長の大柿千代太郎らに迎えられる。

●９月５日　晴れ
　留辺蘂、遠軽の家庭学校訪問

●９月６日　野付牛（北見）泊
●９月７日　野付牛で書会、講演。夜は網走。
●９月８日　網走滞在

の記載があり、常呂の有志一行は、網走経由で列車を使用して上相内まで行き、大町桂月を出迎えた可能性あり。
＊上相内は現在の相内で、大正元（１９１２）年、鉄道院湧別軽便線の野付牛駅（現在の北見駅）ー留辺蘂駅間開業にともない上相ノ内駅として開業

※『常呂村史』の「人物欄」に掲載される有志が幾人も常呂村から下湧別まで同行し、上相内駅で出迎えたことは、それだけ大町桂月に常呂村の人々をひきつける魅力があった証かと思われます。

■大町桂月関連補強資料

■別添１：イワケシュ山の眺望について

「当直日誌」では、午後４時に来村の記載があります。『桂月別巻』では、１１時半に卯原内の駅逓でご飯を炊いてもらい、馬を乗り換えて常呂に向かっています。卯原内ー常呂間は約１９－２０ｋｍで、能取手前から山道を通ります。休憩を挟み、１２時３０分頃に卯原内を出発すると３時間半で常呂村役場に着いたことになり、時速は約８ｋｍ弱。

また、常呂村役場からイワケシュ山ふもとまではおよそ１２ｋｍ。この日の午後８時から市街の公会堂で講演をしたので、約４時間でイワケシュ登山をして往復したことになります。

イワケシュ山の頂上は、４２５ｍの高さで、右側にもう一つ、それよりも低い頂（３７４ｍ）があります。

＊上：「常呂町全図」から抜粋転載

■別添２：大町桂月の登山に関して

＊『大町桂月の大雪山』に、大町桂月に同行した田所碧洋が桂月の登山について次の３つを挙げています（元は「『逸話』故大町桂月翁の褌」からの引用）。

１．先人未踏の山に先鞭をつけること

２．その地方地方の一番の高山に登ること、そして山頂においては一番の高峰に立つこと

３．その山全体を徹底的に極めつくすこと

＊『大町桂月の大雪山』には、大町桂月の健脚ぶりを示す文もあります。

…『日本青年』に寄せた「羊蹄山より」のなかで、〈小生は１０年を期して、日本の名山をことごとく踏破するつもりに候。５０歳を越したる今日、脚なお健なるは、青年時代の運動が一大原因…〉…大正１１（１９２２）年のことであるが、満５３歳にしてなお健脚を誇り自分でも鉄脚と称していた。

『大町桂月の大雪山』に書かれている２つのことから、健脚を活かし、限られた時間でイワケシュ山の頂上に立ち、そこから眺めた景色を堪能したことがうかがえます。

■別添３：講演会場の市街地公会堂と当時の市街地のようすについて

『常呂町百年史』第３章／大正時代の常呂のなかに、北海タイムスの興味深い記事が２つ掲載されています。

１つ目は大正３年７月７～８日付記事で、常呂村の団体と功労者の文の中に「公会堂劇場倶楽部公園競馬場」などの施設が挙げられ、「公会堂」と呼ばれる施設があったこと。

２つめは大正４年１月２６日付記事で、「大正４年１月７日、新年大演説会が興仁館で開かれ、〈村内外知名諸氏参集、満場の盛況〉」と報じた文。

公会堂のことは『常呂村史』では触れていないので何ともいえませんが、興仁館が「当直日誌」記載の「市街地公会堂」の可能性はあります。それにしても、場所・規模は不明です。

＊下の写真は、興仁館建設時の写真とされていますが、年代は不明です。

■明治末期から大正時代、昭和初期の常呂村

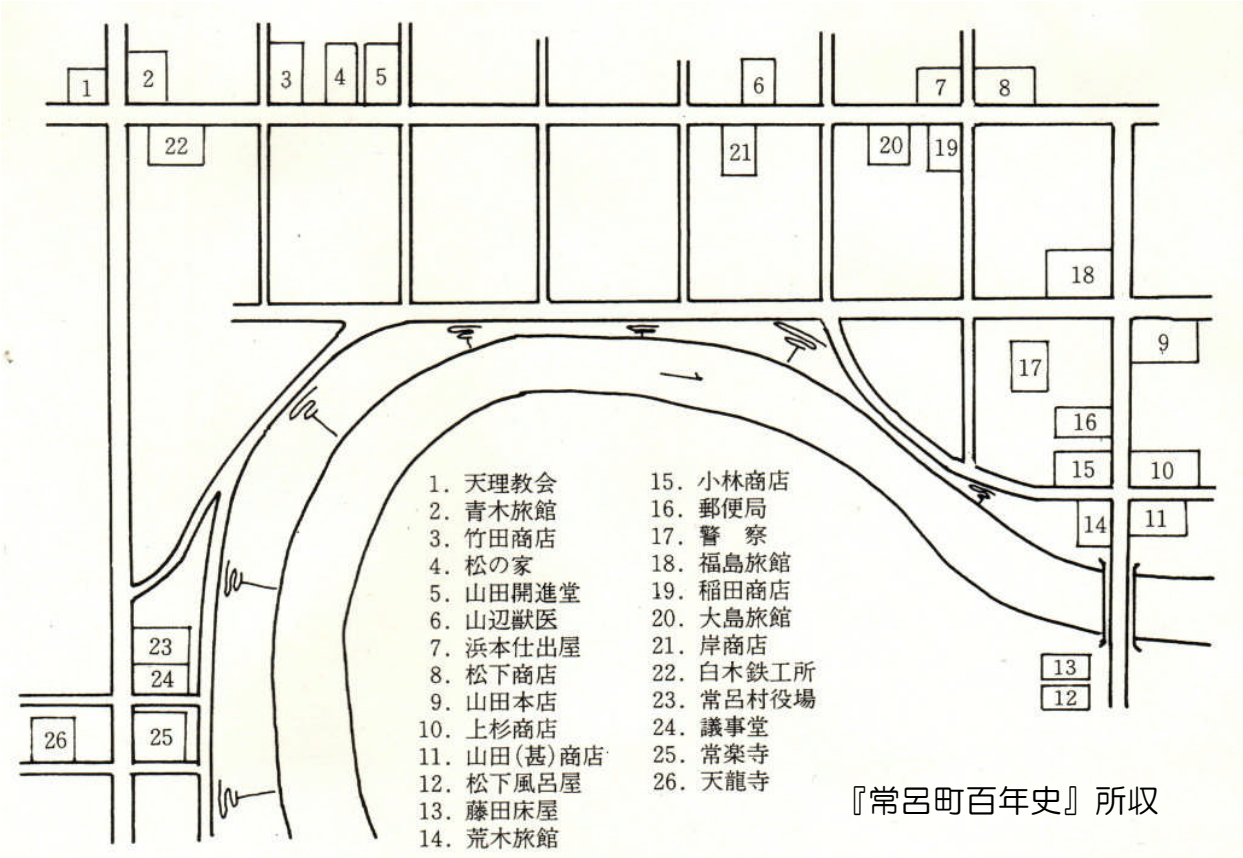
『常呂町百年史』第２章／明治時代の常呂に、「市街は明治４１年に大火に会い、２０数戸が焼失にもかかわらず、農業開拓の進展、木材業の好況、漁業経営者の増加などにより、急激に発展した。明治４４年５月頃には市街戸数は１７０戸をこえ、荒木・相馬・大石・大島などの旅館、荘子・柴田などの回漕店など旧来からの商店と、新谷徳治の木材輸出業兼雑貨店などの新規商店を加え、商店数３５戸余りになり、北見・福吉・横川・喜島楼などの料亭も開業」と明治末期からの常呂市街の発展を紹介しています。

また、同書４章／昭和時代前半の常呂に、明治末期以来の商業の発展、商業経営について次のような証言が綴られています。

「本通り方面では上杉眞治商店、小林国蔵商店、岸商店、山田本店、荒木旅館、大島旅館、浜本仕出屋などが軒を並べていた。代書をやっていた三沢さんもいた。郵便局があったので、その周りに商店ができたのではないか。上杉商店は木材、雑穀などを手広く商っていた。小林商店は雑穀が中心だった。岸商店は小林国蔵さんの奥さんの弟さんの店だった。当時は銀行がなかったので、どのお店にも大きな金庫があった。浜本仕出屋には広間があり、結婚式や宴会はここでやった。料理屋は木材人夫でにぎわっていた」

＊大町桂月が常呂村を訪れた大正１０年の状況そのままではありませんが、イメージをふくらませることはできるかと思います。

＊下図は、聞き書きで再現した昭和初期の商店配置図（現在の中央町・本通り）



『常呂町百年史』所収

昭和初期の市街商店配置図

■大正時代の常呂村：写真資料

大正４年３月の稲田勘二商店
（現在の本通り）

明治４２年８月の山田久七商店
（現在の本通り）

大正１０年の上杉眞治商店　『常呂町百年史』
（現在の本通り）

大正２年８月の旅人宿『常呂町百年史』

＊宿の左端に「滝川常呂製軸工場」の看板があり、同工場は市街地河口付近で操業、
大正９年閉鎖（『常呂町百年史』　この宿は、常呂川河口付近にあったもの

第１回村会議員１０人と常呂村会議場（大正４年）『常呂町史』所収

この年、戸長役場から常呂村役場に変わります。戸長役場の建物をそのまま利用したと思われます。昭和４年に新しい役場庁舎・議場が建設されました。

明治末期から大正
初期の旅宿と浴場
『常呂町史』
＊場所は不明

明治４３年、山田久七が北海タイムスの取り次ぎを開始。写真は、大正元年に開業した書籍文房具の支店開進堂。自転車で書籍・新聞の配達をしていたそうです。自転車の導入は、大正２年（『常呂村史』）または、大正６年、常楽寺建立時の大工と言われているので、それ以降。

大正末期の商店街　『小史常呂』

■別添４：大町桂月の講演テーマについて

大町桂月の思想について、『大町桂月の大雪山』（北海道出版企画センター）には「大町桂月（１８６９年－１９２５年　明治２年－大正１４年）といっても今や忘れられた過去の人物といえるかも知れない。けれども当時の桂月は全国的に広く知られた文学者であった。忠君愛国、国粋的な思想、国士、壮士の気概、硬派の文士、酒仙、気風のよさ、義理人情に厚く風采を飾らない態度と相まって絶大な人気を誇った。ことに男性と青少年に熱狂的に迎えられたのであった。教育勅語そのものの彼の思想と文は教科書にも採り入れられて、その名は全国にあまねく知られるようになった。いうならば当時の国民的文士であった」とあります。

■別添５：常呂駅逓について

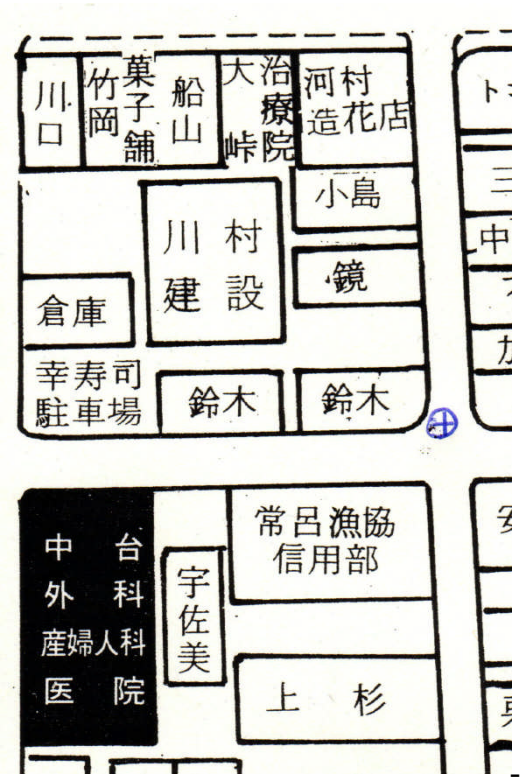
【 常呂駅逓 】

常呂には明治中期から昭和初期にかけて５ヶ所に駅逓がありました。鐺沸・常呂・ワッカ・太茶内（ふとちゃない）・手師学（てしまない）駅逓がそれです。これらの駅逓は常呂の開拓期における交通・運輸の中継地として重要な役割を果たしていました。

駅逓の業務は、通行人の休息・宿泊が主なものですが、人や物を馬で送ったり、時には郵便物の逓送なども行っていました。（佐々木覚「常呂の駅逓」「郷土ところＮｏ５６」所収）

大町桂月が宿泊した「常呂駅逓」の設置は、明治２５（１８９２）年3月３１日（北海道庁告示）で、廃止は昭和５（１９３０）年6月7日（同告示）で、場所ははっきりせず、廃止時は旧常呂漁協信用部（現在の本通り会館）の北側にあったようで、「常呂駅逓所跡の木柱があります。（同資料）

＊青字駅逓マークの場所に常呂駅逓所跡木柱



注：『常呂町百年史』第３章／大正時代の常呂のなかに、『北見発達史』（大正２年１２月発行）に常呂関係の広告が掲載され、「相馬旅館　官設駅逓所・人馬継立所、諸官衛諸商人御定宿、陸軍用旅館」の記載があり、これが駅逓と思われます。

注：『常呂町史』巻末の古老座談会で、駅逓に触れる発言があるので紹介します。

山田：明治４１年に大火があります。今の本通り、大通りにかけ焼けたのですが、焼け残った店は上杉、山田、小林の３店ほどでした。

安部：今の小林さんの裏に相馬屋さんが駅逓をやっていた。その馬小屋付近か火元で風が強かったから一瞬に広がり、２０戸近くが焼けました。

（注：『常呂消防団１００年記念史』では、「４月２２日、郵便逓送の馬小屋から火災発生、市街地５０戸の内２４戸焼失）

■別添６：大正１０年頃の鐺沸

明治４５年７月３０日、鐺沸漁業組合が誕生し、組合長は加藤留五瑠、理事は木田橋智代吉、川畑益蔵、監事に中川三次郎、中野宏平。大正７年からサロマ湖かき漁に磯舟１３隻が着業、かきの養殖事業も開始。大正９年、かき着業船は６６隻に増加。大正１０年、かき漁の定着により、軌道に乗った組合経営ができるようになった、役員改選で組合長加藤留五郎、理事中野宏平、久野繁蔵、監事岡本虎二郎、角田留蔵。（『常呂漁業協同組合４０年誌』から抜粋）

大町桂月が来村した大正１０年当時の鐺沸は、鐺沸業業組合が誕生して１０年目で、かき漁が主体の地域でした。

『常呂町百年史』の付編／古老座談会に、大正１３年に下湧別から鐺沸に移り住んだ人が「その頃の鐺沸の戸数はだいたい２０軒ぐらいで、店が３軒ぐらい。住宅はほとんど掘っ立て小屋程度で、すき間で外が見える」と発言しています。

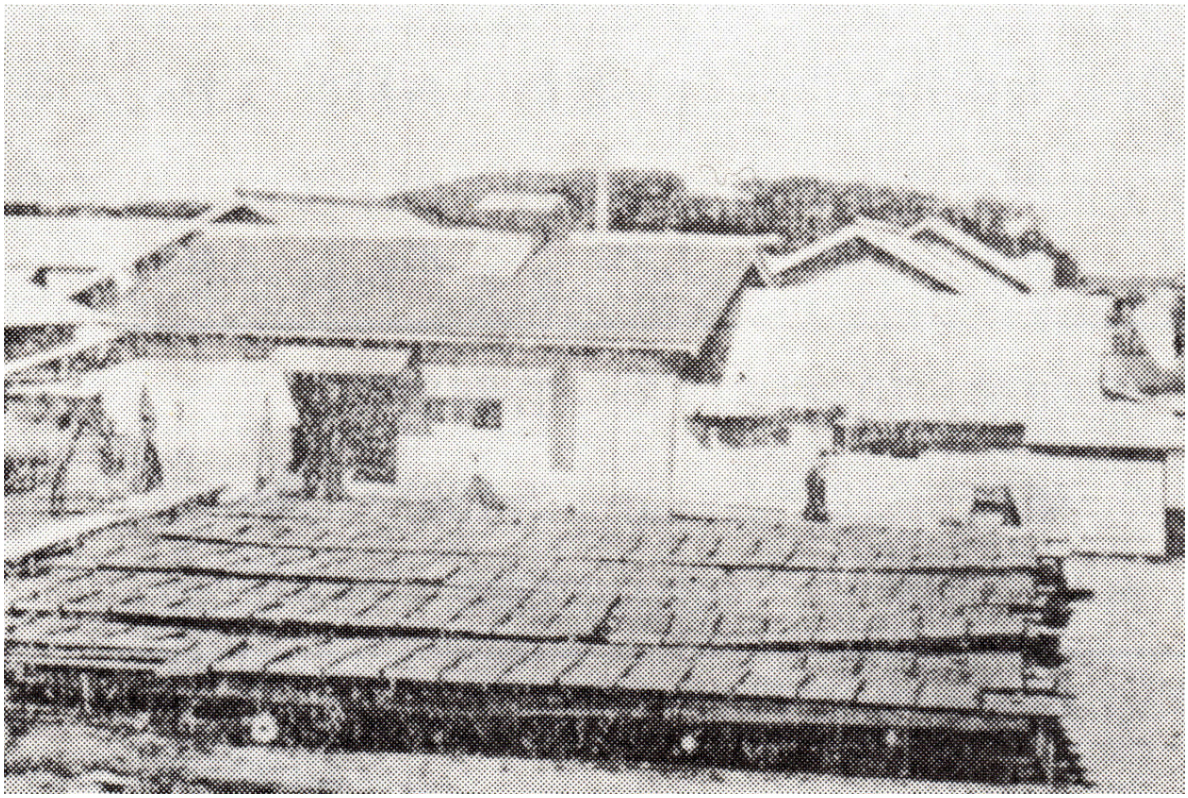
また、『ところ文庫１４　常呂町の昔話』（常呂町郷土研究同好会　１９９８年）の「鐺沸の話（１）」に鐺沸の最盛期を知る人の話として「一番盛んだったのは大正１４．１５年。ホタテ獲りの舟が内地から２５０艘ぐらい来た。料理屋、劇場があり、病院がないだけ。人夫が何百人も入っているので警察の駐在所があった」、別の人は「５０～６０軒あった」と証言しています。

大町桂月が鐺沸で休憩したのは河村重義宅ですが、旅人宿だったので大勢休憩できたからかもしれません。

『常呂漁業協同組合４０年誌』の大正１５年の項では、「ほたてが大正１１．１２年頃より急激に上昇し、この年は村外よりの入漁申し込みが殺到し、その数１００隻を超え、組合員着業船と併せて１５０隻を超える操業で盛況を極めた。しかし、この年の乱獲がたたり翌年から不漁に陥った」と鐺沸の最盛期を綴っています。

残っている鐺沸の写真（最盛期の大正末期から昭和初期）で当時に近いようすを紹介します。

下の写真は『小史常呂』掲載で、大正初期の加藤留五郎のホタテ乾燥場と記していますが、当時の漁業の状況から大正末期と思われます。



大正末期から昭和初期の
鐺沸漁港

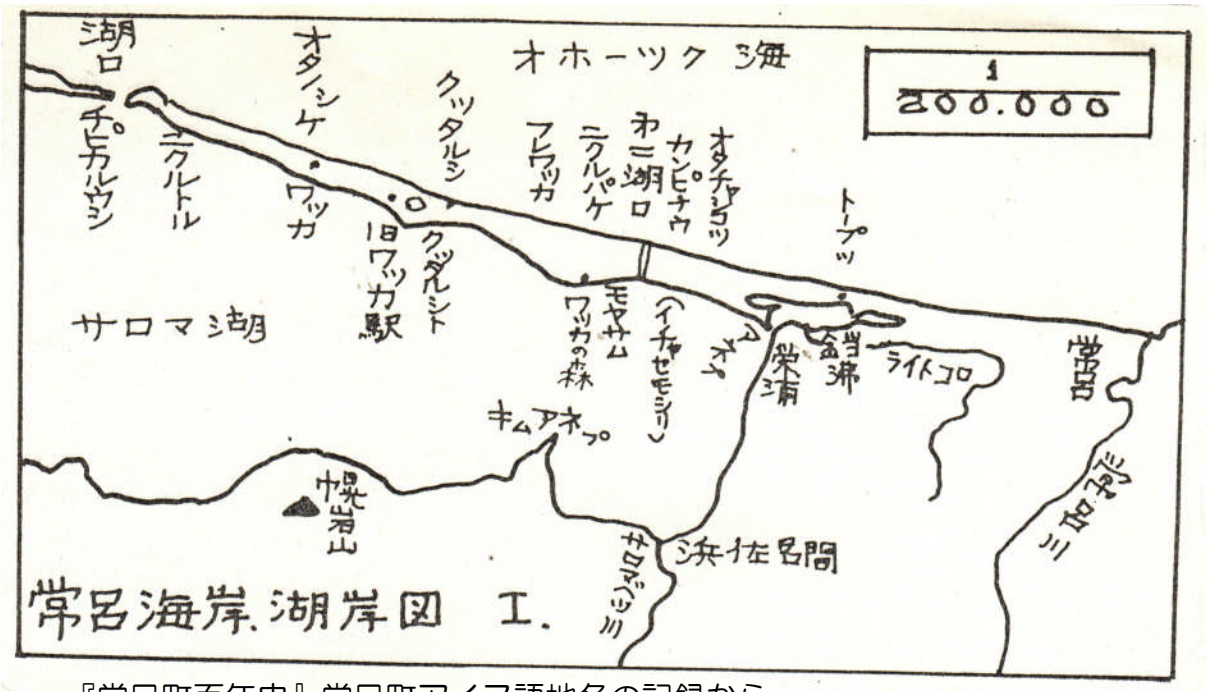
大正末期から昭和初期の鐺沸漁港
＊停泊している動力船は、大町桂月一行を乗せた
船に近いタイプかも

■別添７：「ワッカ駅逓・フレワッカ」について

【 ワッカ駅逓 】

ワッカ駅逓の設置は明治２５年５月１４日（北海道庁告示）で、場所は現在のサロマ湖第２湖口から約４ｋｍ行ったあたりでした。なお、廃止は大正１０年１月１８日（同告示）。

『桂月日記』に「元駅逓」と記述しているのは、この廃止されたワッカ駅逓のこと。



『常呂町百年史』常呂町アイヌ語地名の記録から
ワッカ駅逓・フレワッカの地名が記載

■別添８：人物データ（『常呂村史』から）

１．細川元一

明治１８年、香川県三豊郡上商野村生まれ。大正６年５月ら移住、村役場に奉職。１４年９月退職。司法書士として代書業開設。その間、村会議員、小作調停委員、負債整理委員などの公職を歴任。

２．中野宏平

明治５年、高知県生まれ。明治２８年、常呂村土佐に団体移住、農業に従事。後、常呂校及び鐺沸簡易教育所教員拝命。一時期湧別村役場に奉職、大正元年再び本村に転住、漁業に従事、鐺沸漁業組合理事に就任。大正１２年常呂村役場に奉職、１４年退職。昭和６年常呂漁業組合長に就任、かたわら代書業を営む。常呂蛙声会同人、俳号〈其楽〉。昭和１１年病没。

３．加藤留五郎

明治８年、秋田県生まれ。明治３５年頃常呂村鐺沸に在住、漁業に従事するかたわら牧場経営にあたる。衆望厚く村会議員、私設鐺沸消防組頭、鐺沸漁業組合長を歴任。昭和６年、網走に移住。

４．松田三次郎

嘉永６年、鹿児島県生まれ。明治１６年９月、常呂村外３ヶ村戸長兼警部心得として赴任。本村初代戸長。１４年間在職後、明治２９年退職。鐺沸に居住、昭和１２年永眠。

５．河村重蔵

河村重義と思われる。安政３年頃茨城県生まれ。明治２７年渡道し鐺沸に居住、旅人宿を経営。家事の都合で鐺沸から移転（時期不明）。

６．上杉眞治

明治１３年、大分県生まれ。２９年、団体移住で常呂村に移住、野業に従事。３１年、網走常呂間定期船の小廻業、３３年以来漁業に従事。３６年から店舗、木材業、農場などを経営、北見屈指の大事業家になる。戸長役場時代の総代、村会議員、商工会頭、常呂消防組頭、郵便局長、土功組合議員、その他各種の公職、常呂電気会社社長就任。昭和６年永眠。

７．大柿千代松

明治６年、広島県生まれ。２６年、当麻村に屯田兵として移住。大正４年８月、上湧別村書記から常呂村長（注：第２代）に抜擢、在任１０年。常呂川治水工事を当局に採算陳情し、大正１０年着工。大正９．１０年に国費で２大幹線排水溝工事、１０年に排水土功組合設立。１４年１１月、相内村長に転任。

８．小林千代松

明治２５年、愛媛県生まれ。４０年常呂村に移住、日本郵船会社代理店社員となり、大正７年独立して海運業を営む。昭和９年金物商を開業、１１年湧網線鉄道が開通後は株式会社常呂運送社を創立、社長に就任。連合青年団副団長、消防後援会長、区長の公職を歴任、１２年の村会議員に当選。（注：後、昭和２２年常呂村長に就任）

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞　その他の関連資料　∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

■「９月３日、中野氏がウィスキー２本差し入れ」に関して

『ヒゲのウイスキー誕生す』（新潮社）に、大正時代のウィスキー製造状況が書かれています。概略すると、「大阪府の摂津酒造が明治４０年からアルコール製造に着手し、４４年からは自社で醸造したアルコールをもとに、ブランディ、ウィスキー、甘味葡萄酒などを委託製造。製法はいぜん模造であったが、アルコール特有の臭み（フーゼル・オイル）を消す延久が進んでいたため、品質はそれまでの国産にくらべ、格段の差があった。大正２年にはウィスキーだけで２５０石（４５０００リットル）を製造。日英同盟が結ばれた明治３５年を境に、輸入洋酒の中でウィスキーの占める割合が年々高まり、大正２年には摂津酒造の製造量の４倍強（１０８０石）を輸入。大正４年の第１次世界大戦が勃発、欧米からの輸入が途絶え、各種洋酒が国内のみならず東南アジアに輸出。大正５年、摂津酒造は会社始まって以来の黄金時代を迎えた」と。

※中野宏平が差し入れたウィスキーのメーカー、値段など不明ですが、摂津酒造が製造したウィスキーの可能性があります。

■大町桂月の旅の同行者／田所碧洋（貢）に関して「大町桂月の大雪山」から

＊随行者、秘書、マネージャー役／書会・講演の段取りとして道内旅行に同行

＊小樽の俳人（碧洋子、鏡水の別号あり）

＊明治２６年（１８９３）土佐清水市生まれ、中学校卒業後渡道、小樽の高橋運輸に勤務しながら句作、俳誌「いたどり」編集。桂月の北海道旅行に同行。その後、東京、愛媛を経て高知に住み着く。

■大町桂月が旅した、卯原内ー常呂間及び常呂ー下湧別間の地図は、次ページ以下

「大正１３年測図　五万分ー地形図　網走１６号（常呂）」と「大正４年製図　網走土木派出所区域図」を参照。

「大正１３年測図　五万分一地形図」
網走１６号（常呂）

「網走土木派出所区域図」（大正４年３月製図）

湖
潤
湖
別
村
湯
別
下
湯
別
上
湯
別
村
湯
別
原
湯
別
野
湯
別
駅
常
呂
下
常
呂
原
常
呂
村
常
呂
駅
常
呂
上
常
呂
野
常
呂
駅
茶
内
牛
内
牛
駅
少
牛
村
太
村
沸
原
沸
村
沸
駅
千
代
田
原
千
代
田
駅
千
代
田
村
千
代
田
学
校
村
千
代
田
駅
千
代
田
原
千
代
田
野
千
代
田
駅
千
代
田
原
千
代
田
野
千
代
田
駅
千
代
田
原
千
代
田
野